

名詞の語尾に関する一つの場合¹

緒 論

§1 ロシア語の男性硬変化、或る種の軟変化名詞、並びに中性名詞の一部等に広く認められる複数生格形語尾 {-овъ} はその来源を古く U 語幹名詞に有している。この語尾の一般化は比較的初期の文献に於いて既に見出され、例えば 12 世紀の写本に依って知られる Житие Феодосия にも грѣховъ, плѣковъ, бѣсовъ, дѣховъ, трудоуовъ 等の語がみられるといわれる。

従来これは言語に賦与された一つの「治癒効果」の結果であると考えられて来た²。O 語幹名詞本来の複数生格形 -ѣ(ь) (e.g. вѣлкѣ: конѣ) が単数生格と同形である事に起因する格の混同を回避せんとする傾向の顕現であるとするのである。しかし乍ら、他の諸言語はさておきロシア語自身の内部に於いてすら、例えば солдат, человек の如く、形式を一にする単数生格と何等混同される事なく機能している例の存在を考える時、上述の如き常套的な説明が、十分に説得的であるとは思わないのである。

シャフマトフが {-овъ} の一般化の副次的な要因として「複数生格という観念がこの語尾 (i.e. {-овъ}) に結びついていた」ことを挙げているのも、上述の如き弱点を意識していたからではないであろうか。

しかし乍ら複数生格の観念が {-овъ} の借用以前にこの語尾と結びつき、O 語幹名詞の複数生格を置換するほど強力なものであるためには、(1) U 語幹名詞、あるいは U 変化名詞に属する語彙の数が大であるか、或いは (2) 各々の語の頻度が十分に高いか、の何れかでなければならない。しかるに (1) これに属する語彙は古代ロシア語、古代スラヴ語を通じて極めて少数であり、また (2) これに属する名詞の裡のある種のもは比較的高い頻度を保有しているものの、O 語幹名詞をも含めた全体の系から見れば、何等かの意味を持ち得たと信ずる事は困難である。近来 U 語幹に属していたと思われる名詞を種々の方法によって求め、U 語幹名詞の数は、従来考えられているよりも遙かに大であった事を論証しようとする傾向がみられるのも、このような困難を打開しようとする試みであると考えれば、よく理解する事ができる。しかしこのような試みにも拘わらず、この種の名詞の数は、飛躍的に大きくなる訳のものではなく、例えばエッケルト等の努力を以ってしても³、その数は 30 にも満たないのであって、上述の困難打開に明るい見透しを与えるものでは

¹ 『日本ロシア文学会報』 第7号 1964年9月 10-21頁。

² А. А. Шахматов, *Историческая морфология русского языка*, М. 1957, p. 263.

³ Р. Еккерт, К вопросу о составе группы имен существительных с основой на -ѣ в праславянском языке, *ВСЯ*, вып. 4, 1959.

ない。O 変化による U 変化の吸収という事実そのものがこの事を立証している。

§2 U 語幹名詞の O 語幹名詞への拡大を、U 語幹名詞の系の特殊な状況に求めようとする傾向も、古くから認められるが、これも畢竟上述の困難を克服するための方途に外ならないと考えられる。

例えば、シャフマトフは単数生格語尾 {-y} の拡大に関して「おそらくすべてのロシア諸方言において語尾 -y と結合したのは対象の不活性ではなく、その個性の欠如、何か個別的に規定された、個々のものであると考えることができないという観念である」とし、「おそらくこれは (сынъ, воля のように) 活動体の対象を示さない大部分の U 語幹名詞が抽象的、あるいは集合的意義あるいは何等かの特質の意義と結合したことに依るのであろう」と述べている。即ち U 語幹名詞の大部分は不活動体の対象を表わすものであった為に、その語尾 {-y} がそのような価値を有するようになり、{-a} に吸収されることを免がれたというのである。単数前置格 {-y} も同様に説明される。

この説明は上述の単数生格及び前置格に関しては極めて合理的であり見事な説明であるが、他面極めて大きな弱点をも有している。何故なら U 語幹に由来する語尾が必ずしも常に不活動体、集合等の意義と結びつくとは限らないからである。例えば単数与格形 {-ови} は、O 語幹の単数与格語尾 {-y} に対して主として活動体名詞に使用されている。シャフマトフの説明によれば、これは U 語幹の単数生格及び前置格が O 語幹の 不活動体名詞 に借用せられた結果、この単数生格、与格、前置格は何れも {-y} をとり、{-ови} ははじき出されて止むなく単数生格に {-a}、前置格に {-ъ} を有する O 語幹名詞 — 即ち活動体名詞 — と結合するに至り、やがて「活動体」を表わすようになる、というのである。

我々はこの着想の秀抜さと、ここに発揮されたる恐るべき独創力に讃嘆を惜しむものではないが、それにも拘わらず、この行論自身の内部に含まれる矛盾を指摘しないわけにはいかない。第一にもし不活動体名詞の単数生格、前置格に U 語幹の語尾 {-y} が借用せられたとしても、それが与格に {-ови} を使用する事の妨げにはならない。寧ろ先に述べた通り、格形の同一化による職能の混同の回避という原則からすれば {-ови} の使用こそ、希ましい筈である。第二に例え {-ови} が不活動体名詞の体系からはじき出されたとしても、それが直ちに活動体名詞と結合しなければならない理由はない。むしろ消滅するのが自然であり、消滅しなかった事こそ、説明されねばならない事である。

複数主格形 {-ове} も現代ロシア語においては廃用に帰したが、古代ロシア語の場合には主として活動体名詞に使用されていた。シャフマトフは、この現象を説明する為に「U 語幹の変化において -ове は正に活動体名詞に使用され、他方不活動体名詞は -ове を -ы によって置換した 事による」と述べている。しかし乍ら真に説明を必要とするのは、何故に不活動体名詞において -ове が -ы によって置換されるに至ったかという事である。

このような矛盾は、これら一連の現象を単に現象面からのみ取扱おうとする所から生ずるのであると思われる。

複数生格語尾 {-овъ} の一般化の過程は、現代ロシア語においては、活動体、不活動体の区別なく行なわれて居り、この限りでは、O 語幹において単数生格と形式を同じくする複数生格の職能の混同を回避する為に {-овъ} が一般化したという説明も、或程度妥当するかにも考えられる(この説の矛盾については上述)が、その過程を検討すれば、活動体の範疇と可成り高い連関を有して居り、{-ови}、{-ове} 等と本質的には同じ現象であるとせねばならない。

このような所から、{-овъ} の一般化を考察することは、上述の一連の問題の解明に、大きな手掛りを与えることになると考えられる。

この小論の主旨は、正にこのような所にある。

§3 資料はノヴゴロド原初年代記シノダリ本、及びコミシオン本である⁴。シノダリ本においては {-овъ} の使用は未だ散発的であるが、コミシオン本においては、この語尾の使用は記述の年代の降るに従って増大して居り、この時期に {-овъ} の一般化の傾向が本格的になったとみて差し支えないようである。しかも {-овъ}、{-ъ} 両形の選択に関しては、アカデミー本トルストフスキー本等の異本は概ね一致しており、例外は僅少である。この故にこの写本の信頼度もまた高いといえよう。

本 論

I. 伝統的 U 変化名詞

§4 シノダリ本、コミシオン本を通じて古代スラヴ語に於いて {-овъ} をとっていたものは、殆んどすべてこの語尾を保存している。これに属するのは本来の U 語幹名詞、および若干の本来 O 語幹名詞である(домовъ C54-2, K121-11, 177'-14, 207'-17, 294-14; медовъ K73'-6; сыновъ K52'-16, 54-18, 68-6, 173-18; удовъ K47'-12; ならびに даровъ C165-11, K50'-3, 200-3)。

これに対し古代スラヴ語で U 変化ではなかったにも拘わらず、常に {-овъ} をもって現われるものに дворовъ がある(K121-13, 121'-1, C77-6, C110'-7 etc.)。これはその頻度(C 9 例、K 14 例)からみても、偶発的なものとは考えられない。或いは домъ との所謂 *analogie sémantique* によるものかも知れない。

逆に古代スラヴ語では {-овъ} をとるにも拘わらず、{-овъ} / {-ъ} の両形を兼有するものとして грѣхъ がある。

これらの名詞における {-овъ} の使用は、大体において古代スラヴ語における変化形式の伝承であり、語構成論的条件に依存している。従ってこの語群の群化は専ら形式によるものであって、意義的には何等統一がみられない。

⁴Новгородская первая летопись старшего и младшего изводов, М.-Л. 1950.

II. 語の形式による影響

1) 音韻的条件による影響

A. 語末の音韻による影響

§5 現代ロシア語においても татаръ, бояръ, болгаръ 等は {-овъ} を有しない。гусар, кирасир, гренадер 等もこれに属している。ここから {-овъ} は /-аръ/ 或いは /-ръ/ に終る語に及ばなかったとする見解も生ずる。

しかしこの条件を満足する даръ, дворъ 等が {-овъ} をとる事から、この見解は却けられる。また татаръ 等の語に {-овъ} が一般化しなかった理由を、単数生格における singulatif の接尾辞 {-инъ} の存在による複数生格との形態的相違に帰せしめようとする所説も、混同のおそれがあったにも拘わらず {-овъ} をとらない гусаръ 等の存在によって成立しない。

B. アクセントの影響

§6 ヴァイアンは {-овъ} による {-ъ} の置換を格の混同を回避する為であるとする立場から、アクセント、あるいはこれと結びついたイントネーションによって複数生格を単数主(対)格から区別できない場合を挙げている。古代ロシア語において、個々の語のアクセントが如何なるものであったかについては十分な資料を持合せないが、現代語のアクセントから類推する限りでは、アクセントの影響には、一概に否定し去る事のできないものがあるように思われる。

この影響は一口に言えば、単数主格と複数生格とがアクセントに於いても同形である場合の外、斜格において語尾にアクセントを有する語でも、複数生格 {-ъ} はアクセントをとりにくいことから、アクセントをとり易い {-овъ} に替えられたということである (e.g. борцо́въ < *борцѣ, возо́въ, волхво́въ, городко́въ, живото́въ, конце́въ, коне́въ, корабле́въ, короле́въ, купце́въ, плѣко́въ, посло́въ, рубле́въ, строже́въ, щито́въ etc.)。

本来の U 語幹名詞 домо́въ, медо́въ, сыно́въ および、比較的早い時期に {-овъ} の語尾をとるに至ったと言われる даро́въ, дво́ровъ, грѣхо́въ, городо́въ 等が何れも語尾にアクセントを有する事からみれば、このような U 変化名詞が原型となり、アクセントを語尾に有する場合 {-овъ} をとるという意識が生じたと考えるのは、全く自然である。

§7 しかし既にヴァイアンも認めているとおり、このようなアクセントが、両形の選択をすべてに互って規制していたとは考えられない。古代スラヴ語の U 変化名詞 у́дов もこの法則に合致しないが、古代ロシア語においても、このような例は極めて多い (e.g. бѣсо́въ, бѣрковѣ́сковъ, дѣнежѣ́тниковъ, злодѣ́евъ, кня́жцовъ, кѹ́бьковъ, лѣховъ, наими́товъ, на́мѣстѣ́тниковъ, перево́зниковъ, поса́дни-

ковъ, прѣгородовъ, порóковъ, смѣрдовъ, товáровъ, торгóвцевъ, úгровъ, цѣсаревъ, яблѣковъ)。гостебниковъ, лодѣи́никовъ, перевѣ́тниковъ, пискуновъ 等も恐らくこれに属するのである。

また逆に斜格に於いて語尾にアクセントをとると考えられるにも拘わらず、{-ъ}をとるものもある (e.g. врагъ, вѣ́къ, годъ, диакъ, еретикъ, квасъ, криви́цъ, манасти́ръ, отецъ, пло́дъ, скотъ [грѣ́хъ])。

§8 以上から、両形の選択に際するアクセントの影響は、決定的なものではない。これらの諸例を検討してみれば、そこに極めて興味ある傾向が、微弱ではあるが、認められるように思われる。すなわちアクセントを語尾にとらないにも拘わらず、{-овъ}をとるものには、指人名詞が多いことである。この事を特に指摘しておきたい。

2) 形態論的条件による影響

A. 接尾辞 {-ец-}, {-ич-}, {-ик-} の影響

§9 現代ロシア語においては、人物を表わす接尾辞 {-ец-}, {-ич-}, {-ик-} を有するものは、{-ев} あるいは {-ов} の語尾をとり、形態論的に条件づけられている。古代ロシア語においてもこの種の名詞は {-овъ} をとるものが比較的多いが {-ъ} をとるものもあり、必ずしもこの語尾の使用が {-ец-}, {-ич-}, {-ик-} 等の存在によって条件づけられていたと考えることはできない。

B. 接尾辞 {-ан-} の影響

§10 接尾辞 {-ан-} を有する語は、現代ロシア語におけると同様に、例外なく古形を保っている。この故にこの種の語に {-овъ} が一般化しないのは、既に当時形態論的条件として意識されていたかのようにも見える。しかし乍らこれは皮相な見解であるように思われる。上述したように両形の選択が一般に形態論的、あるいは音韻論的条件のみによるものでなく、他方古い形態論的条件づけが大きく崩壊しつつある事を考えれば、当時 {-овъ} と {-ъ} の使用に関する明確な規準が立っていなかったか、極めて弱いものであったと考えられるからである。{-овъ} と {-ъ} の使用の規準が立っている現代語においては {-ан-} の存在は {-овъ} をとらない 形態論的条件 であるが、古代ロシア語においては、特殊な例外として考えられる可きであろう。ここで問題とすべきは、古代ロシア語においてこの種の名詞が何故 {-овъ} の一般化を拒否したかという理由であろう。

III. 語彙の意味論的群化

1) 民族、地域的、社会的集団を表わすもの

§11 先に述べた гусаръ, кирасиръ 等は、現代ロシア語に於いて複数生格に古形 {-ъ} を保存しているが、これらは「軍隊の一部をなすもの」の名称であるとされている。кыянь

のように {-ян-} の接尾辞を有するものは、或る地域の住民あるいは民族を表わす語である。татаръ, бояръ 等も元来は外来語であるが、すべて民族名乃至社会的集団の名称である。これらに共通しているのはその集合名詞としての性格であり、この点に関してこの種の名詞は極めて顕著な群化を示していると言うことができる。所謂 singulatif の {-инъ} が附加され易いのもこのような性格によると考えられる。

- (1) бояръ C18'-6, 67-8, 81-6, 89'-10, 145-3, 159-10; K181'-8, 196-10, 204-16, 209-3 etc.; бояръ K104'-5, 135-16; татаръ C164'-13, 165-2; K168-5, 200-10, 200-12, 206-4, 227-15, 239'-13, 261'-2; тотаръ 263'-3.
- (2) дворянъ C89'-10, 89'-10, 144-2, K181-2; важанъ K240'-14; вожанъ K165'-13; волжанъ K229-3, 229-5; галичанъ K158-5, галицанъ K195-21; городчанъ K195-21; двинянъ K237'-6, 237'-12; Емцанъ K211-6; изборянъ K210'-2; кыянъ K90-8, 103-15; концянъ C90'-11; концанъ K140-12; крестиянъ K240'-11, 243-10 etc.; христьянъ C126'-6; ладожанъ C103'-7, 145-6; K103'-12, 148-12, 145-6, 205-11; мурманъ K251'-2; новоторжанъ K158-18; полочанъ C139-2, 140-10, 140'-3; K178-2, 178'-16, 178'-17; римлянъ K86'-10, 164-16; рушанъ C95'-4, 95'-6, 118-8; K143-13, 143-14, 157-12; смолянъ K155'-17; соломлянъ K35-14; чернянъ K125-5.

§12 このような名詞が {-овъ} をとらないのは、集合名詞というような意味論的契機によるのであって、その形式によるのでないとすれば、形式的には何等の共通性を有しない語群でも、もし集合体を表わすという意味論的面上における共通性が認められるときには、{-овъ} が一般化しないはずである。このような推定が事実である事は、資料によって立証することができる。варягъ K29'-11, 78'-10, 79-7; вои C16'-6, 84-2, 86'-8, 98-3; K40-7, 43'-7, 79-9, 79-10, 84-15, 98'-26, 103'-8, 136'-17, 138'-5, 162-3, 236'-5; врагъ 67-14, 84'-15; готъ C13-4; грекъ K38'-6, 46-10; грикъ K72'-16; гричь K213'-18; касогъ K86-13; латынь K64'-6; народъ K73-10; печенѣгъ K38'-1; печенигъ K68'-4; словень K68'-3; срачинъ K130'-11; съсолъ K84'-11; щекъ K38'-6; фрягъ C67-9, 67'-2, 68'-10; K127'-7, 127'-9, 128-13; языкъ C51'-2, 52'-9, 53'-5, 173-16, 173-17.

例外としては угровъ (K38'-7), ляховъ (K47-8, 90-9, 90'-2, 244-17), пълковъ (C93'-3), плъковъ (K183-13), полковъ (C147'-5, K162'-5, 142-3, 245-5), пословъ (K236-5) を数えるのみである。

このようにこれらの語は何れも民族名あるいは社会的その他の集団の名称であるが、語の構成あるいは音韻の面では統一が認められない。この故にこれらの語が {-овъ} をとら

ないのは、その意義に依ってであると考えざるを得ない。{-ян-}を有する語が{-овъ}をとらないのも、実は語の意義を媒介とする間接的なものに過ぎないとせねばならない。

§13 {-ец-}, {-ич-}の接尾辞を有するものは両形をとり得る (§ 9)が、このうち民族名、社会的その他の集団を表わすものは、若干の例外を除いてすべて{-ъ}をとる。**велневиць** K211'-13; **вятиць** K68'-3; **деигуницъ** 400-1; **коломець** K252-17; **кривиць** K68'-3; **купьць** C80'-1; **пупецъ** C159'-2, 160'-12; **низовьчь** C118-3; **низовецъ** K157-6; **нѣмьць** C117'-8; **нѣмецъ** C129'-7, 158-7, 158-9, 162-10, 165'-8; **оньхъполовиць** C90'-11, K140-12; **островълецъ** C103-11; **плъсковиць** C105'-3; **плъсковичъ** C104-8, 127'-4 etc.; **плесковиць** K103'-12, 149-14, 155'-2 etc.; **половьць** C31'-6, 97'-2; **половьчь** K89'-5, 96-10, 96'-9, 97'-10; **половецъ** K89'-7, 110'-12, 143'-9, 144-2 etc.; **суждальць** C15'-8, 26'-4, 36-7, 37-5; **суздалецъ** K108-18, 113-2; **суждалецъ** K103-9; **тѣѣриць** C222'-9.

{-овъ}をとるものはシノダリ本では{новъгородьць}, {новоторжьць}の二語のみである。コミシオン本ではその他、新たに**нѣмцовъ**, **купцевъ**が加わる。これはシノダリ本では{-ъ}をとっているものがあるが、使用頻度が高く書写の誤りとする訳にはいかない。これらについては後に考察するが、**купьць**を除いて何れもシノダリ本において生=対格を使用する傾向の強い語である事を特に指摘する必要がある。

以上の外コミシオン本では**борцовъ**, **княжицовъ**, **концевъ**, **торговцевъ**, **чернцевъ**があるが、何れも散発的である。

2) 宗教関係の指人名詞

§14 宗教用語としての指人名詞は、殆んどの場合古形を保存している。**аггелъ** K49-19, 92-18, 92'-2, 164'-13; **апостолъ** C45-9, 111'-6, K66'-2, 114-15, 117'-11, 119-14, 153-7, 217'-5, 215'-8, 254'-3, 254'-5; **архиепископъ** C125-5; K161-5; **бесребреникъ** (qui gratis facit) K185-14; **диакопъ** K60'-19; **дьякъ** C90-8; K100-18; **еретикъ** K63-12; **исповѣдникъ** K245-12; **мученик** C156-6; **мученикъ** K66'-2, 120-5, 133-8, 148-11, 155'-17, 163-17, 177'-16 etc.; **мученикъ** 115'-4, 124'-11, 133-7, 167'-15, 224-6; **праведникъ** 188-9; **черноризецъ** 125-6.

この外**отъць**, **отрокъ**, **ученикъ**もこれに属すると考えられる。**отъць**はすべて**отъць духовный**の意味で使用され、**отрокъ**は1例(K91'-10)を除いて三人の若い聖者の称として使用されている。**ученикъ**は「キリストの弟子」の意味である。**и съгорѣста церкви** 2; **святого Михаила, а другая святыхъ отецъ** C44-9 etc. (C45-10, 110-7, 120'-3, 126'-8, 155-8, 155'-3; K55-15, 64-10, 64-12, 64-15, 64-16, 64-19. etc.); **постави церкви нову архиепископъ ... въ имя святыхъ 3-и отрокъ; Анания,**

Азария, и Мисаила, и Данила пророка С49'-2 (С92-4, К58-8, 141-3, К241-18).

これらは何れも高い文体に使用されて居り、一種のアルカイズムと考えることができる。生 = 対格形がこの種の語群に比較的早く一般化することはこの点に関して逆の結果を示していると言わねばならない。кровопролитецъ (К123-5), кровопроливецъ (К159'-7), мироносицъ (К262'-2) もこれに属すると考えられる。例外をなすものは чернецъ である。

3) 権力者を表わす語

§15 {-овъ} をとるもののうち、比較的明瞭な語群を形成するのは、権力者を表わす語である。княжицовъ К127-11; королевъ С153-3; намѣстниковъ К208'-12, 260'-6; пановъ К261'-6; паневъ К257-17; посадниковъ К229-16, 240'-12, 256'-9, 263'-10; цесаревъ С72-3.

これも社会的身分の高い人物を表わす語に生 = 対格が使用されている事とよく対応する。

4) 一定の職業に従事する人物

§16 職人を表わす語も、例外なく {-овъ} をもって現われている。гостебниковъ (К185'-3), дѣнежниковъ (К264-6), перевозниковъ (К264-6), перевозниковъ (К23-8), лодѣйниковъ (К207'-2), наймитовъ (К101'-10).

§13 の борцовъ (К208'-13), торговцовъ (К200-10), купцевъ (К196-13, 231'-13, 261'-15) もこれに属せしめる可きであろう。この類の名詞に生 = 対格が使用されることがあった事実は、前節と同じく興味のある事である。

§14 の例外として挙げた чернецъ も「職業」を表わすものと考えられるのではなかろうか。高い文体に使用される чърноризыцъ に対して一つの職業的身分として把握されているようにも思われるのである。cf. а с нимъ князя Михаила Ондѣевича и иныхъ множество бояръ и молодыхъ людей и чернецъ и черницъ ... (К268-18)/ Новъ же градъ заступи богъ ... и Афанасеи и святыхъ правовѣрныхъ князей и преподобныхъ черноризыцъ иереискаго собора (К161-6). пискуповъ もこれに属するものであろう (К181-2). смердовъ (К120'-4), сторожевъ (К141-11) もこれに属するかも知れない。

5) 「邪悪さ」というセマンテーム

§17 以上の語群を分離した後、析出したものに бѣсовъ (К43-13, 90-4, 94-7), волхвовъ (К148-9), злодѣевъ (С134-10), перевѣтниковъ (С158-9) がある。これらは何れも頻度は小であるが、「邪悪さ」という意義素を共有している。このように自然に析出した語群が、それ自身意味論的な群化を示すことは、{-овъ} の使用が何よりも先ず意味論的カテゴリーと深く関わっていた事の証左であろう。

6) 動物名

§18 これに属するのは **коневъ**, **гадъ**, **скотъ**, **псъ** のみである。何故このような相違が現われたかは、明らかでないが、**псъ** は常に屍肉を喰うものとして表われており、**гадъ** と共に忌わしいものと考えられていたようである。

7) 「不活動体」の対象を表わすもの

§19 上述したもの以外の所謂「不活動体」に属する対象を表わすものの場合 {-овъ} をもって現われるものは極めて少数であり、またこれらの語には認められるべき意義の共通性もない。**возовъ** K36'-23; **вѣрковъсковъ** K73-5; **градовъ** K257'-9, 144'-1; **городовъ** C153'-8, K37-14, 108-3, 180'-18, 231'-15, etc.; **городжовъ** K204-14; **кораблевъ** C69-8; **круговъ**? K105'-12; **кубъковъ** C70'-1, K129-13; **павосковъ** K263'-15; **пророковъ** C162-9, K198-14; **щитовъ** K197-14. この外例外なく {-овъ} をとるものとして **животовъ**, **рублевъ** がある。その高い頻度からみて {-овъ} の使用を単なる偶然と考えることはできない。が、その理由は不明である。{-ъ} をとるものについても、意味論的群化は認められない。

IV. 使用における差異

§20 同時に両形をとるものは極めて少数であるが、この場合には実際の使用における相違が問題となる。

この相違が比較的明瞭に現われるのは **грѣхъ** の場合である。**грѣхъ** はコミシオン本において、その大部分が **грѣхъ** ради (дѣля) の形で使用されている (48-13, 57'-7, 59-15, 87-9, 88'-15, 152-2, 158'-12, 161-8, 161'-1, 222-10, 218-11, 226'-8, 239'-14, 260-2)。これに対して **грѣховъ** の大部分は *nomina actionis* の補語として使用されている (**отпущение грѣховъ** K68-8, 133-8, 148-13, 171'-2, 177'-11, 178-15, 203-7; **оставление грѣховъ** K58-16, 259-10)。

この外 **грѣхъ** には前置詞 **отъ** の補語となるもの 2 例 (K67'-7, 152-4)、定動詞の補語として **всѣхъ** を伴うもの 2 例 (K87'-2, 152-4, 161-12) がある。**грѣховъ** はこれに対して定動詞の補語として **立ち**、**своихъ** を伴っている (K154-16, 159'-13, 182-3)。シノダリ本では **грѣховъ** は **грѣхъ** の 8 例に対し 2 例を数うるに過ぎないが、**отдание грѣховъ** (139'-5)、**грѣховъ своихъ плакалися** (121'-10) のように、上述の用法と合致している。

この語はその意義から宗教的な文体に多く使用されているが、この点に関しては両形共差異は認められない。従って **грѣховъ** が主として *nomina actionis* に使用され、或いは **свои** を伴って動詞の補語として立つ事からすれば、{-овъ} は生格に立つ語の意義を卓立強調する場合に使用されると言い得るのではないかと思われる。

その他 {градъ}, {новъгородъ} など両形を兼有するものが少数あるが、これらの

場合、特に際立った特徴は認められなかった。しかしこれらを通じて {-овъ} が活動体対格として使用される場合が、本来の生格の場合よりも多いという傾向が認められる。(表は略)

結 論

§21 以上から {-овъ} の使用は、活動体対格の成立の過程と、語彙の群化において著しい類似を有する事が明らかである。従ってこの語尾の使用は、本質において他の U 語幹名詞の語尾 {-ови}, {-ове} の O 語幹への拡大と同じものであったと考えられる。

しかし乍ら、活動体対格の場合は、これが対象を行為の全面的な影響下におく対格と、部分的にしか行為の対象とならない部分生格という本来の職能の発展として形成されたものであるのに対し⁵、{-овъ} と {-ъ} の対立は、尠くとも初原的には、単なる形態の相違に過ぎない。活動体の場合と異なり、終始つきまとして離れない曖昧さも、ここにその理由をもっていると考えられる。種々の外乱に堪え得るほどには明確で積極的な職能を持っていなかったからである。

結論を急ぐが、このような所から、{-овъ} の使用は一種の強調作用の結果であると断じたい。このようにすれば、これが個性の強い対象を示す語、指人名詞等に現われ、活動体の場合に酷似しているのも、当然と考えられる。両者は「個別性」と「強調作用」という点で結びつくのである。грѣхъ と грѣховъ の使用も、このことを裏付けている。邪悪な人物を表わすものに {-овъ} が現われるのも、この故であろう。「好ましからざる」事物は常に「好ましい」ものより深刻な印象を与えるからである。

§22 この点に関して、古代スラヴ語における U 変化と O 変化の混同を сынъ を例としてみれば、次のようになる。(В. П. Беседина-Невзорова による⁶。)

(1) G.Sg. сын-оу/сын-а; Inst.Sg. сын-ѣмъ/сын-омъ;

L.Sg. сын-оу/сын-ѣ; N.Pl. сын-ове/сын-(ов)-и;

D.Pl. сын-ѣмъ/сын-омъ; L.Pl. сын-ѣхъ/сын-охъ

(2) G.Pl. сын-овъ/сын-ѣ; N.Pl. сын-ове/сын-и;

Inst.Pl. сын-ѣми/сын-ы; G.-L.Du. сын-овоу/сын-оу;

D.Sg. сын-ови/сын-оу

(3) V.Sg. сын-оу/сын-е; N.-A.Du. сын-ы/сын-а*

(*先に挙げてあるのが U 変化、太字の部分は使用頻度の高いもの)

⁵ 「ノヴゴロド原初年代記シノダリ本における活動体と不活動体の区別について」『古代ロシア研究』第2号昭和37(1962)年参照。

⁶ В. П. Беседина-Невзорова, *Старославянский язык*, Харьков 1962, p. 136.

(1) は U 変化 O 変化双方の語尾の音節数が等しい場合であり、この場合は何れも含まれる母音の開きが大である方が多く使用されている。(2) は語尾の音節数が異なるものであるが、この場合は、音節数の多いものが一般に使用されている。(3) は以上の例外であるが極めて僅少である。

このように、既に、古代スラヴ語においてもより明確な語尾への志向は歴然たるものがり、{-овъ} の使用も結局はこのような事情を背景としていたと考えるべきであろう。相対的に明確な語尾は、より強い語尾と意識され、やがて強調の機能を伴って、活動体に近い色彩を帯びるようになるのである。活動体の範疇の一つの表現であるとされる {-ови}, {-ове} も、本来は強調形であったとして説明されうる。ここから {-овъ} の一般化も、{-ови}, {-ове} に対応する O 語幹が一応独自の語尾を有しているのに対して、{-ъ} との懸隔が遙かに大きかった為であるとして説明することができよう。

かく解する事によって、ロシア語に於ける所謂部分生格 {-y}、西スラヴ語における単数生格 {-u} 等も、O 変化語尾 {-a} に対する相対的な「弱さ」の結果として矛盾なく説明することが可能である。若しこれを語幹の区別によって、固定的にしか把握しないならば、緒論に於いて見たように、忽ちにして撞着に陥るであろう。

個々の現象の解明は、今後の問題となるであろうが、以上の結論は、U 語幹並びに O 語幹名詞に関して、問題の統一した把握を可能ならしめると共に、今後この問題の取扱いに当っても一応のパースペクチヴを提供し得るのではないかと思われる。敢えて試論のまま御教示を仰ぐ所以である。